張文環小説における古典的女性

北見吉弘

育達商業科技大学応用日本語学科助理教授

摘　要

作家張文環は台湾の日本殖民統治期における地方社会を背景に多くの小説作品を残した。これら作品の残した成果の一つは当時封建社会において非人道的扱いを被っていた女性人物の生活描写である。このことに関連し、現在我々は張文環小説における女性人物に関係する多くの人物論関連の研究を目にすることができ、当時の台湾人女性の生活、性格、命運等の様子が理解できるのである。

本研究は張文環がその小説創作における女性人物の一つとして描かれた古典的人物に焦点を置いたものである。古典的という意味には伝統的、旧時代的といった、その他多くの女性人物と関連しているようだが、古典的人物の場合は作者の理想概念を多いに含むことから極めて限られ、登場人物も少ないのが特徴である。

旧式女性に関する研究はすでに多くの成果が見られるため、今回は、現在なお詳細な説明が見られない古典的女性に関して検討をおこない、その作品において描かれた様子、作者の託した思想性、及び作者の理想概念がもたらした限界などについて説明したいと思う。

キーワード：張文環、女性、古典的女性、台湾文学

張文環小説裡的古典女性

北見吉弘

育達商業科技大学応用日本語学科助理教授

摘　要

作家張文環以日據時代的台灣鄉下為背景，留下了很多小說作品。這些作品的成果之一，就是對於當時在封建社會裡面受到非人道待遇的各種女性的描寫。對此，現在已經可以看到相關的研究，也能夠了解作家所描寫當時台灣女性所生活、性格、命運等情形，而本研究的焦點在其中目前還沒做到詳細探討的人物形象，也就是作家所謂的“古典女性”。

這個被作家所描寫的古典女性的特色而言，她們具有與傳統女性雷同的性格，不過，也具有較濃厚作家所寄託理想概念，因此極受到不少現實上的限制而所出現的數量並不多。

由於有關舊時代女性方面已經看到不少研究，本研究要探討目前還尚未詳細探討的古典女性方面，而在此要解釋這些人物形象描寫的情形、作家的思想性，及作家理想概念所帶來的特色等。

關鍵詞：張文環、女性、古典的女性、台灣文學

Classic Women in Zhang Wenhuan's novel works

Yoshihiro Kitami

Assistant Professor, Department of Japanese, Yu-Da University

Abstract

Writer Zhang Wenhuan took the Japanese occupation period in the countryside in Taiwan as the background of the novel creation, and created a lot of fiction. One of result of these works is the analogies s to those lives of those women that being discriminated in those days in Taiwan feudal society. So now we can see a lot of studies related with the female characters created by Zhang Wenhuan, and also can understand those female character's lives, fates and personalities etc.

The focus of this study is one of the female characters called classic woman in the novel creations by writer. The "classic women" sounds related to traditional，or ole styled women, but due to the elements of the ideal concept of the author，the number of characters are quite limited and not so much.

The research about the old styled women in Zhang Wenhuang's novel creation is already frequent, and there is not so much space doing more, so this time I examined about the classic women in the work that was not done by others in detail. This paper intended to explain about it, including the ideal concept of a state drawn in the work, the thought about the characteristics of the writer and the limited possibility in the description.

Keywords： Zhang Wenhuang, female, classic women, Taiwan Literature

張文環小説における古典的女性

１・序

張文環の小説作品におけるヒロインは、主に処女作「落蕾」からはじまり、「父の要求」、「地方生活」、「頓悟」、そして長編「山茶花」などに続くもので、特徴としては作者の少年期から青年期における自伝的要素を基に描かれた作品に多く登場し、また、それらヒロインには作者の個人的な愛憎の深さが見られる。これら関連する作品は少なからず恋愛小説的な性格を有し、ヒロイン像にしても当時の少年期から青年期における作者の目線に立った存在として描かれている。本研究が対象とする古典的女性像は多くは知識青年（主に作者の分身たる書生やインテリ男性として登場する人物を指す）の立場による描写となっており、作者の女性に対する憧憬、理想、愛惜など感情、及び思想的な意味における女性に対する見解などが伺えるのである。

先行研究においては、これら古典的女性を旧女性に包括し、その性格、思想、生き方、運命などを論じたものが多いように感じられる。だが、あくまでも多くが旧女性の範疇における分析が主体となっているのであるが、その範疇が古典的女性に絞られ、更に詳細な分析が加えられた研究は今のところ見られない。まず、作者の作品において多く登場する旧女性と、今回の研究の対象である古典的女性の両者を比べた場合、前者が伝統社会に生きる女性一般としてより当時の台湾人女性の実際の描写に忠実なのに対し、後者は作者の異性に対する理想概念や思想性の主張を目的とする造詣となった感が強く、極めて限定された存在となっている。張文環の小説作品はリアリズム的な性格を有することで知られ、作品中に登場する旧女性として描かれた女性像には当時の台湾封建社会で抑圧され虐げられた女性の様子を詳細、刻銘に描き出したものとして知られるのであるが、古典的女性像の造詣においては客観的な意味における人物描写の深さの追及よりも作者個人の主義主張を旨とすることから幾多の旧女性像とは極めて異なった造詣の傾向が見られるのである。

今回の研究は古典的女性が描かれた理由、人物造型の特徴、さらに作者の理想概念がもたらした人物造型における矛盾や限界の様相などを論じたものである。

２・作者の小説作品における古典的女性とその人物造詣

2.1　古典的女性としての教養上の条件

作者の作品において古典的女性が刻銘に描かれた作品は「山茶花」と「地方生活」であり、これらは作者が小梅公学校において日本式の新教育を受けた６

年間（1919 年～24 年）及び日本留学終了までの期間、ならびにその後の日本留学終了による台湾帰国を背景としている。これら作品の前に発表された初期作品においては、唯一、処女作「落蕾」のヒロインである新女性の秀英[1]に古典的女性に通じる性格描写が見られる以外は、ほとんどの作品で描かれたヒロインは主に旧女性の範疇において封建社会の犠牲者や被抑圧者として登場する。まず、この「落蕾」、そして後の「山茶花」や「地方生活」などインテリ青年が主役となった代表作の背景が、日本による公民化教育制度の一環として、また台湾人に対する義務教育の場として総統府により設けられた公学校の普及[2]である。そしてこの公学校での教育の普及につれ、時代と共に台頭したのが新女性であり、それら新女性の実態に関する描写が「落蕾」、「山茶花」らの主な内容の一つとなっている。

実際、作者自身が「田舎」と称した部落、農村などにおいて過ごした青年期においては、封建的で伝統的要素を強く残しながらも、近代教育としての公学校制度の普及が進み、若年の世代（すなわち作者と同年齢）に属する一般女性はほとんどが新女性である。そのため、作者の作品において描かれた古典的女性は旧時代に属する存在であることで、作者と同時代の生活を共有した密接的な人物だとは言いがたい。主にその小説創作における古典的女性の登場は作者の青年時代に台頭していた新女性[3]のありのままの現実を描くための対比手段

---

[1] 張文環の小説にヒロインとして登場する女性は、新女性、旧女性、インテリ女性、古典的女性、現代的女性などがあるが、「落蕾」は処女作であるため、作者の女性像おける性格付けが渾然となっている。、秀英は公学校卒業生であり伝統的価値観に疑問を有し、新女性としての証として愛する男性と恋愛関係にあるいっぽう、作者好みの「文學少女」であり、その性格描写が思慮深く控えめな一面を有すること、そして親への孝徳のために自己犠牲のかたちで好きでもない男性との縁談に臨むことなどから古典的女性としての一面も有する。そもそも「落蕾」は前後の統一性が欠けている作品としての指摘も受けている。（引用：張文環、「落蕾」、『日本統治期台湾文学　台湾人作家小説集』第四巻〔張文環〕、東京、緑蔭書房、1999 年 7 月 20 日一版、p. 22）尚、新女性、旧女性、インテリ女性、古典的女性、現代的女性といった用語における更に詳しい説明は「張文環の小説に登場する女性の結婚相手に関して」（『世新日本語文研究』第三期、台北、2011 年 3 月）に述べられている。

[2] 1895 年、日本による台湾統治が開始された翌年、台湾総督府は 1898 年 8 月 16 日、「台湾公立公学校規則」、「台灣公立公学校官制」及び「公学校令」を発布し、日本人子弟が通う「小学校」と分けて台湾人子弟（一部原住民子弟）が通う「公学校」を中央または地方が経費により設置した。8 歳以上 14 歳未満の台湾籍学童に対し 6 年生の義務教育を実施、台湾人に対し徳教を施し、実学を授け、低学年は当時で言う国語の話し方、読本を中心とした授業体系であった。

[3] 張文環の小説作品全体において「新女性」という用語は作品「芸妲の家」の一箇所のみに見られるだけである。以下はその引用である。「采雲は公学校時分の友達などをさそつて、淡水河の岸から、大龍峒の畠の方へ歩いたりして、暢気さうな生活をはじめた。（中略）女店員になつてゐる友達の秀英は、自分よりも頭がひらけてゐるやうな気がしてならなかつた。資本家だとか、搾取だとか、また恋愛至上主義などの言葉も飛び出したりするのである。（中略）秀英には話題が多く、殊に恋愛問題に就いては随分に造詣深くかんじられた。二人はまるで新女性の先覚者のやうに、胸には一杯春風を吸ひ込んで、梔子の花畠を通つて行く。」都会の商店

として設けられた感が強い。このことに関して、以下の「山茶花」からの引用を参考されたい。

> 教養のない女性は、賢はむしろ昔の習性をそのままに守つてもらつた方が社会の秩序を保つにいいことだと思ふのである。旧思想を新思想にかへてもらふには社会的な環境が要る。それで賢は現代的な女性をみても、古典的な女性をみても気持がいいものである。一番鼻持ちならぬのは、どつちともつかずに、何んの心の準備もなく、男と手をにぎるのが現代的だと解されてゐる女である。東洋の女性は環境から云つても、教育から云つても、接吻をただの友情にとどまることが出来るかどうか考へものである。しかし日本の教育は、内容を叩き直すよりも、先づ形式を重ずるやうになつてゐるので、かう云つたやうな先走りの女がふえてくるのも無理ではないのではないので賢は腹を立つことも出来なかつた。[4]

「山茶花」は公学校制度の普及と共に、旧時代の女性に代わり台頭した新女性の様子を描いた作品であり、かつ作者が始めて意識して古典的女性を登場させたのも同作品に於いてである。この作品でいう当時の一般女性は新女性であり、反封建的な自由恋愛、近代的な都会憧憬、そして反道徳的な個人主義を有した人物であることで、作者にとっては「教養のない女性」と映る存在である。引用にある賢という人物は、公学校就学から高等学校までの期間における作者本人の自伝的要素を引き継いだ、いわゆる作者の分身であり、作者はこの作品の賢という人物を通じ、地方社会に生きる女性一般、即ち新女性に批判を与え、そして、その鞭撻の手段として「現代的」と「古典的」との二種類の理想的女性を設けた。

「現代的」というのは、主人公の公学校時代の“女の先生”（都会から赴任した未婚の若い女性）のような教養を備え社会的に自立した都会的な女性を指す。[5]だが、“女の先生”たる人物の生活基盤は都市を基礎としたもので、作品にお

で働に勤務する二人の女性はいずれも公学校卒業生である。これら女性は「現代的」と妄信する非現実的な「恋愛至上主義」に憧れる傾向を有する。作者がこの二人の女性を公学校卒業生に特定し、それを「新女性の先覚者」と論じたことは、当時台湾社会で台頭していた新女性、すなわち作者「山茶花」で述べた「教養のない女」としての実際の様相を示したかったからであろう。（引用：張文環、「芸妲の家」、『日本統治期台湾文学　台湾人作家小説集』第四巻〔張文環〕、東京、緑蔭書房、1999 年 7 月 20 日一版、p. 126。）

[4] 張文環、「山茶花」、『日本統治期台湾文学集成２　台湾長編小説集二』、東京：緑蔭書房、1999 年 7 月 20 日一版、p. 247。

[5] 作者はこの特殊な存在である“女の先生”に敢えて固有名詞を加えなかった。それは、その存在をこのうえなく高尚な存在とみなしていたからかも知れない。以下の引用は作品にみられる人物描写である。「クラスの女の子や自分の表妹の美娟に親しみをかんじられないと云ふのも、賢は女性の対象を女の先生以外に思はないからである。それは異性のしたはしさと云ふよりも純真な美しい愛性がひそんでゐるふうに思もはれる。蒼々とした菜葉が朝露に慕ふやうな自然な物である。（中略）しかし先生の鋭敏な、そして理智的ひらめきをかんじると賢は女の

ける登場もごく限られたものである。そして肝心となる「古典的」というのは、「古典的で可憐」、「懐古的でロマンチック」、「女の標本のやうに見えて、凡べての女性の模範のやうに思はれる。」[6]などの形容から判断して、極めて作者の観念的、理想的な見方が感じられるものである。旧式の女性というよりも中国伝統の貴族の生まれの娘としての懐古的な意味合いが強く、漢字の読み書きができ、中国古典文学にも嗜みがあり、かつ封建的な道徳性や婦徳間などを備えた女性を指す。だが、作者が古典的女性をして理想的に過ぎる極端な形容を以ってしたのも、やはり新女性に対する鞭撻、批判の効果を考慮したもので、それら人物設定は作者個人の思想主張のための意図が濃厚であり、現代的女性が実際に伝統的な地方社会に存在しないこと同様に、古典的女性も於いても非現実的、時代錯誤的な意味において新たな時代における台湾地方社会で生活するには不相応な存在となっている。以下は「山茶花」錦雲に関連した記述からの性引用である。

> しかし錦雲はその代り父の血筋をうけて、昔詩賢文と云ふ昔の女が読む本を一冊叔父さんに教はつた。そのお蔭で、昔の陳杏元和番だとか孟姜女、或は三伯英台や陳三五ぐらゐは読めるので、母や妹美娟や賢なぞは姉の影響をうけて、昔話に興味を覚え、賢なぞは龍鳳配と云ふ本を学校へ持つてきて、休み時間に合歓の蔭で読んで友達にきかせたことがある。[7]

作者は現代的女性の教養における象徴として学校の先生、ピアノの先生などを例にするのと同じく、古典的女性に対しては古典文学に精通し漢文が読め、儒教道徳に忠実な存在としている。以下は「地方生活」に登場する古典的女性の婉仔に関する引用である。

> 澤が本を讀んでゐるとき、婉仔がきて、澤の漢文教科書をとつて、すらすらと讀むことがあるので澤は目を見張つた。第一課の日出山上と云ふ所は婉仔には餘りやさしくて、赤坊の本みたいだと偉らさうな顔をして威張つた。[8]

この婉仔という女性は主に伝統的で人情に篤い家庭教育の恩恵を受けてを、良妻賢母としての十分な素養を培った人物である。作品においては女学校に進学し反道徳的で利己的な妹の淑との比較を通じ、作者の古典的女性の理想的たる見解が最大限に示されている。

先生をまさに女神の再現であるかのやうにかんじた。」（引用：張文環、「山茶花」、p. 33）

[6] 同注４、p. 47。

[7] 同注４、p. 44。

[8] 張文環「地方生活」、『日本統治期台湾文学　台湾人作家小説集　第四巻〔張文環〕』、東京：緑蔭書房、1999 年 7 月 20 日一版、p. 279。

また、今回は主な研究対象としていないが、作者の晩年の長編作品「地に這うもの」に登場した家庭主婦像呉氏錦にも、往来の古典的女性に共通した特徴、即ち、伝統的才女たる学識や素養を具備した点、思慮深く控えめで内気といった性格面、儒教道徳に忠実な思想性などに於いて、張文環の古典的女性描写における共通した造詣傾向が見られる。[9]

2.2　古典的女性の家庭条件

当時の田舎育ちの女性として古典的女性の存在は極めて稀な存在であったことは、「殊に姉娘の漢文の出来ることは母にとつては奇異に感じかんじ、昔のお姫様の産れかはつてきたやうに思はれて何事につけても娘に一目置いてゐた」[10]との一文より容易に理解できることである。古典的女性が庶民女性のもたない「お姫様」たる印象を有することで、作者は当時の台湾地方社会における存在意義における非現実性を示しているとも言える。以下は「山茶花」よりの引用である。

> 母の一ばん恨んでゐるのは家の生活が思ふやうにならないことである。若し家が裕福であれば姉娘はお姫様であるし、妹娘は女の先生である。[11]

引用における「姉娘」とは、古典的女性である錦雲、そして「妹娘」とは新女性の娟であるが、引用における一姉妹は現実の封建的利害結婚による圧迫を受ける、少女時代から結婚適齢期になったばかりの段階に限定されたものである。だが、当時の台湾において多数を占める庶民家庭の娘が「お姫様」としての高貴で気品ある姿のまま過酷な実社会で成長し自立するには相応の家庭条件が不可欠である。唯一、同作品に登場する女性で、条件に合致しているのは嬋のみである。この嬋という人物は主人公賢の公学校のクラスメートだった女性で、有力者、権力者である父親を持ち、かつ裕福な家庭基盤を持つ女性である。以下は主人公賢の異性への憧れが示された箇所である。

> 賢は自分の恋の対象を何故かいつも田舎娘のやうな気がした。（中略）これは賢の幻想であり、夢であつた。田舎の金持の娘が女学校を出て家で小説に読み更けつてゐるところへ賢の縁談を持ち込むと云ふ按配である。そ

---

[9] 以下は作品「地を這うもの」からの呉氏錦の性格的側面、及び古典文学修養における関連した引用である、「おまけに彼が今日もらった花嫁は当時としては珍しく読書好きだという評判である。」(a)、「花嫁は翌朝、誰よりも早く起きなければならない。みなが起きているのに、花嫁がまだ寝室に残っているのは、恥ずかしいことである。誰よりもさきに起きて、髪をくしけずり、身なりをととのえて、神前や祖先の位牌の前に三杯の熱い清茶をそなえるのが、主婦の務めである。呉氏錦は神前に立ったら、昨夜の猫のことなどは忘れてしまった。」(b)、「美人で読書のたしなみのある妻」(c)、「お前は里でずいぶん古書をならったそうだね。女でも字がよめないと不便なものよ」(d)（引用：張文環『地に這うもの』、東京：現代文化社、昭和50年9月15日発行、a：p.28、b：p.30、：c：p.32、d：p.32）

[10] 同注8、p.46。

[11] 同注8、p.46。

れが自分の理想な妻になるのだつた。二人の結婚式は殿様とお姫様のやうにものに想像された。妻の里は或る部落の物持ちで庭には刻述べた様な花が一杯咲いてゐた。怜悧な妻は田舎の花そのままの純真さで自分を迎へてゐる姿は牽牛織女の姿そのままのやうな気がした。しかしそんな部落に女学校を出た娘がゐるだらうか。賢はやつぱり幻滅の悲哀に打たれ、あまりに空想的な自分に恥ずかしさを覚えるのだつた。非現実的希望に一生を誤まらせるに違ひないと賢は警戒するのだつた。[12]

賢の恋する相手の名前は特に示されていないが、物語全体の内容から判断し、それが嬋であることは間違いないであろう。同年齢（公学校のクラスメートだった）の嬋は、少年期における賢が淡い恋心を懐いた女性である。また、主人公が引用で女性の名前を示そうとしなかったことは、両者の間に存在する階級的な身分の違いがあったからである。それは賢が公学校卒業後、中学校、高校へ進学し、少年から青年へと成長した段階で徐々に感じたことである。物語における嬋の公学校卒業後の人生はまさに主人公が想像した如く順風満帆なものであり、「女学校」を出た後「教員」[13]となり、当時の女性の理想的結婚相手である公学校教師との結婚を実現する。[14]すなわち女性である嬋からすれば、たとえ賢が「村で始めての中学生」[15]となった男性であったとしても、身分的な格差が存在するため、一般庶民たる賢などははなから相手男性としての範疇外にあったのである。

賢がもしや嬋を恋してゐるのではないか、と疑つたが、しかし賢のやうな性格から考へて　みれば、それはあり得ないことであつた。嬋の父親をみても、また女学校へ行つてから嬋はますます貴族的な態度で村の娘達に臨んでゐるのをみると賢を疑ふわけにはいかなかつた。[16]

引用における「貴族的で村の娘達に臨んでゐる」という表現は嬋たる人物の印象を悪く感じさせるものであるが、この表現が主人公の立場からの発言であることを考えた場合、作者の主観的な感情と関連する意味で、主人公の恋愛対象に対して痛感した卑屈間、劣等感がもたらした相手への断念の情とも捉えることができる。そこには自分の伴侶に出来ない意味での一種の高嶺の花如き不可侵な存在とする作者の女性に対する思想性が伺えるのである。

---

[12] 同注 4、p. 244。
[13] 同注 4、p. 296。
[14] 以下は関連箇所の引用である。「嬋が隣り村の富豪の子息で公学校の教員をしてゐりる青年と結婚したときは、村の人は今までで見たことのない貸切のタクシーが幾台も村にやつてきた。仕合せなんだ、と口々に云つてゐる村の人達の顔まで賢の目に浮んでくるのである。」（引用：「山茶花」、p. 294）
[15] 同注 4、p. 131。
[16] 同注 4、p. 239。

「山茶花」、「地方生活」、「土の匂い」などの作品を見ても、そこに描かれた古典的女性は、主に書生やインテリ青年といった立場に立った男性の立場からによる見方が主であり、また、これら女性が作者の新女性に対する批判としての比較手段となっていることはすでに前述したところである。だが、作者はこれら古典的女性に当時の男子青年の恋慕や憧憬として描きつつ、「山茶花」で描かれた錦雲の如き旧時代の年上の女性、嬋のごときインテリ女性として大成する同年齢の女性にしても、いずれも当時の一般家庭出身の男性、すなわち書生やインテリ青年の恋愛や結婚における憧憬の対象となっており、かつ同時に手の届かない無縁の存在となっているのが特徴である。

３・「山茶花」、「地方生活」における新女性との対比

3.1「山茶花」

「山茶花」は作者の公学校時代を背景にしたもので、作品におけるヒロインは主人公の幼馴染、クラスメート、恋人として登場する新女性の娟である。娟は少女時代においては担任の先生が級長にしたがるほど「利口」な娘で、しかも「きりつとした可愛い娘で目鼻立ちもよく」、「素朴な美しさはやはり人の心を引きつけてゐた」ほどの娘である。また、まだ少年時代にあった頃の賢からすれば、娟は「こざかしいきざな」、「憎らしさうな」、「威張りくさる」、「お天婆」、「まるで世の中には怖いものがないように男の子のほつぺたでも平気で撲る」[17]といった、自己顕示欲と勝気が強いお転婆娘として映った。だが、これら性格面での要素は新しい時代の女性に備わった特赦な魅力として感じられたのも事実である。

実際、作者の少年期や青年期を背景にした作品においては、このようなお転婆型の新女性が多くヒロインとして登場しているものが多い。前述したように新女性は自由恋愛主義に憧れ、脱封建伝統による新たな生き方に憧れを持ち勝気が強いと言う意味において利己的側面を有するものである。娟においても、やはり反伝統的な世俗的価値観を有しており、自由恋愛を掲げながら賢を恋人にしたのも、「村のはじめての大学生である賢が自分の恋人であること」[18]、「少なくとも村ぢゅうで一番仕合せな娘である」[19]といった新女性に共通する俗世間的な虚栄心があった。「山茶花」における古典的女性の登場は主にこのような新女性の批判のための対比となって設けられたものである。

作品には古典的女性である錦雲と嬋の二人が、ともにこの娟をめぐる対比の

---

[17] 同注 4、p. 41～42。
[18] 同注 4、p. 295。
[19] 同注 4、p. 295。

手段として登場する。まず、主人公賢が公学校就学時における少年時代を背景に、そのクラスメートとして登場する嬋について論じたい。まず以下の引用を参考にしたい。

> 嬋と云ふ女の子は、娟に次ぐ頭のいい子で、内気な子供であつた。娟が嬋よりも成績がいいのは嬋の内気が損をしてるやうにも思はれるのだつた。ほんとをいへば、賢はクラスのなかで一ばん好きになれる女の子は嬋であるやうな気がするのだつた。嬋もときどき好意のもてるやうな親しみの含んだ目で賢を見ることもあつた。その目付は娟の親しみの目とは違つて弱々しくいぢらしさうな目だつた。それであるから賢のすることはいちいち嬋の目に留つてるやうな気がするのだつた。男見たいな娟に見られるよりも賢は嬋に見られるのが楽しみであつた。だから賢は嬋の嫌ふ徒ら小僧になるのを警戒してゐた。[20]

> 嬋が娟の仕打ちによく我慢が出来るのは女の子同志でもあるが、それよりも娟は嬋を家来のやうに思つてゐるからに違ひない。だから腹の立つときはよほど嬋に、娟と交きあふな、朱にまじはれば赤くなると云つてやりたいでれど、何んだか男らしくない感じがするので云ふのをやめた。（中略）よつぽど娟はお目出度い女の子だと思はれる。結局単純な子だ。実際娟よりも嬋の方がいいやうに思はれる。ただ娟の成績が嬋のうへになつてゐるのは、どうみても嬋が娟のふらつぱな勢ひに恐れをなして、例の喧嘩の時のやうに誰か一人譲ればいいのにと云ふ気持と同じらしい。[21]

以上の二つの引用は嬋の公学校時代における性格や様子を論じたものであり、繰り返し的な表現が見られることからも、作者はこの二人の少女の相反する性格をかなり意識していたと見られる。

続いて、この娟をめぐるもう一つの対比対象である姉の錦雲とのありかたを見てみたい。以下は作品からの引用である。

> 娟は賢の目から見れば、あるときはまるで狐の産れ代りのやうで怖気をかんじるのである。子供の智慧でどんなことが出来るのかと思ふのである。大体賢は余り自分を中心に考へすぎるから余計にさう思ふのだ。それで賢は姉の方が好きだと云ふのも姉は花にたとへたら白い椿の花か百合の花のやうにやさしい。しかし娟はまだ堅い蕾ではあるが紅い少ししつこい花のやうに思はれる、赤い椿の花は頬っぺたの赤い田舎娘のやうで、また田舎出の女中さんにも見える。[22]

---

[20] 同注 4、p. 89。
[21] 同注 4、p. 93。
[22] 同注 4、p. 60。

自分の美しさに見惚れて、つかひ道のないことを泣いてゐるのか、姉はやつぱり弱々しく見えてならなかつた。弱い姉の気性にくらべて自分は強くて我儘にもかんじられた。姉は迫害をうける花のやうに可哀想でならなかつた。姉さんの方が綺麗だと言つてるのをきくと、娟は姉に嫉妬する気持も起るが、一生懸命に洗濯してゐる姉をみるとそんな気持は起らなかつた。そこへ行くと自分はたくみに世の中をくぐつて行けるやうな気がして仕合せに思ふのであつた。自分は大胆で決断力があるからだ。だから自分は姉を譲らなければならぬと思つた。[23]

主人公より年上の女性として描かれた錦雲は「村で評判の美人」[24]であり、また、気が優しく控えめ目で、「花にたとへたら白い椿の花か百合の花のやうにやさしい」[25]、「フリージヤの花のやうでよわよわしい」といった形容がなされ、作者は錦雲が旧時代に属する存在、嬋が同年齢の女性として新時代に現れたものとして意識した。一方、娟に対しては上の例のほかに、「姉の方と違つてきついからね、さう安々といぢめられるやうな娘ではない」[26]といった例も見られ、その性格描写は正反対のものとなっており新女性特有の性格を示しており、やはりそこには古典的女性の優位を示したいという作者の意図が表れているのである。

娟と嬋との比較が、公学校就学を背景とする新時代における女性を対象としていたのに比べ、ここにおける娟と錦雲との場合は新旧両時代の女性の比較となっており、作品における両者の描かれ方は、性格面に限らず、新式、旧式といった生活様式、封建的と個人主義的といった価値観、古典文学と自由思想といった教育内容等のように、極めて広範囲における違いが示されているのである。作品「山茶花」全体を通じて作者が描き出した台湾地方社会における女性の存在は、当時の公学校制度の普及がもたらした新女性の台頭、そしてその対極的、対比的な存在となる旧女性の衰退であり、そこには作者の伝統的な婦徳観の消失に対する愛惜の思い、そしてその伝統的美徳が新たな時代の女性に対して期待できないことによる旧時代的な懐古的、理想的な願望が示されているのである。

女はしとやかでなければならぬこと、女は結婚するまで男と口をきかないこと、また女はみさをがあつて始めて女の資格があるのである。[27]

---

[23] 同注４、p. 66。
[24] 同注４、p. 39。
[25] 同注４、p. 60。
[26] 同注４、p. 267。
[27] 同注４、p. 247。

この一言は伝統的貞操観念を失い、自由恋愛を認める多くの新女性に対する批判を含んだものであることは言うまでもない。ただし、作者自身は、錦雲の如く一般家庭の出である古典的女性が既に社会における適者生存に値しないことは十分に自覚している。当時の男尊女卑の道徳観、利害重視の結婚、資本主義的な拝金主義、利己的な価値観が蔓延する現実社会において、このような娘は「迫害を受ける花」[28]の如く存在となり易く、適者生存が不可能だったからであり、このことは、それ以前に発表された「みさを」、「闇雞」等の作品に示されている如く、それら旧時代の女性の結婚後の不幸な様子を見れば明らかである。作者が古典女性を懐古的な存在として扱ったのも、その存在自体が時代に即していないからであり、だからこそ人物像における理想製、非現実性がより顕著なものとなっているのである。

3.2「地方生活」

まず、この作品の発表は「山茶花」と前後しており、人物造型や人間関係に類似性が見られるだけでなく、新女性の生き方を中心にその思想性や価値観を描いたことでも共通する。主人公はやはり「山茶花」と同じく、作者の分身的存在として登場する文学専攻の学生であるが、その生活背景、年齢などは異なり、「山茶花」が公学校就学から高等科へ進学した書生であったのが、この作品では日本での大学留学を終了し帰郷したインテリ青年となっている。続いて、作品に登場する新女性像においては女学校出や大学進学などを実現した、いわゆる新女性の進化型とも言えるインテリ女性が対象となっており、その比較対象となる古典的女性に於いては儒教的伝統をより強く引き継ぐ媳婦仔があてられている。

まず、新女性として登場する淑に対し、作者は「山茶花」娟と同じように庶民家庭の出身に設定し、聡明、我侭、活発、男勝り等といった同様の性格を受け継がせた。だが、この作品では新女性の社会的生存を描くことが念頭にあったと考えられ、作者はこの淑に対し新女性の唯一の生活の手段たる進学という条件を加えた。ただし、庶民出身の女性に対する高学歴取得の設定は作者の小説作品全体における人物傾向から非現実的、虚構性を含むことは否定できない。[29]とりあえず、作者の新たな人物設定により、淑は娟の轍を踏むことを免れ、

---

[28] 同注４、p. 66。

[29] 以下作品からのは関連した引用である。「公學校を出た淑は、R 部落にかへなければならない筈なのに、彼女は同じ C 市の女學校に入這つた。妙な娘だ、と澤も淑の運命を奇異に感じてゐた。村の公學校の先生は入學期になると、戸籍簿をめくつて、子供の家を訪ねまはり、新入生を勸誘した。そのために澤の父は校長の手前上斷り切れないので、淑を楊にも斷らずに公學校に入れてしまつた。喜んだのは淑である。その淑がまた姉の婉仔にそそのかされて、女學学校這入れ這入れと云はれた。自分を犠牲にしても妹を女學校に入れたいと二人で母や父をかき口説いた。（中略）兄達をさし置いてもお前達は勉強するのか、と父に訊かれた時も、婉仔は、

社会的な生活基盤を確保し、最後は理想とする男性（医者専門学校の学生）との縁談を勝ち取るのである。淑たる娘が前述した娟より勝っていた点は、淑が公学校時代にすでに女性の不幸の原因が封建社会の結婚制度にあることを熟慮し、反社会的な自由恋愛の如く逃避的な手段を選ばず、新女性の唯一の生存の手段としての進学によるインテリ女性への道を選んだこと[30]、そして同じくその反道徳的ありかたとしても娟の如く封建的結婚から逃れるための恋人のいる都会への奔走といった衝動的で破滅的なやり方でなく、将来を見通して親兄弟や親戚すべてを敵に回しながら遺産相続を主張するという現実的、理性的手段を行ったことにある。そういった意味ではこの作品は「山茶花」以上に新女性の利己的、反道徳的側面をより濃厚に描き出した作品となっていると言えよう。このようなインテリ型かつ生存型の新女性の淑に対して、作者が新たに設けた古典的女性が主人公澤の結婚相手となる媳婦仔の婉仔である。この婉仔は「止腹為婚」[31]による媳婦仔であり、作品「部落の惨劇」や「媳婦」に描かれた媳婦仔たるヒロインの如く性格が卑屈になることなく、慎み深さ、控えめな様、内向的、慎み深いという古典的女性特有の性格を有する。更に付け加えれば、この作品における二人の女性の関係は婉仔が姉、妹が淑となっていることから、「山茶花」での人物設定を引き継いだのは明瞭であり、この婉仔にしても錦雲と同じくその篤い儒教の婦徳観、かつ相応の古典文学[32]の教養を有することから、作者は錦雲を強く意識していたと考えられる。

兄達は家のものです。捨てられることはありません。いぢめられることもありまっせん。これで兩親が折れて、淑をＣ市の知人の家にあづけることにした。」（引用にある「かへなければ」は「*かへらなければ*」の意味であろう）（引用：「地方生活」、p. 281。）

[30] 淑は封建社会における女性の社会における不合理で非理性的な扱われ方、例えば「某留学生が糟糠の妻を捨てた」(a)とか、「夫が偉くなると、頭の古い妻を捨てる」(b)とかいった現実を把握しており、将来的に己に降りかかり得る同様の不幸を回避するため、庶民家庭の出ながらも女学校卒業の高学歴という手段で自身の価値を高め、最後は裕福な良家の「医者の卵」(c)との縁談を勝ち取る。（引用－ａ：「地方生活」p. 281、ｂ：p. 281、ｃ：305）

[31] 一般的な媳婦仔の遣り取りは、金で買い取った娘を息子の将来の嫁として自分の家で育てるものだが、「止腹為婚」は親しい両家による「貰う」ことを前提とし、結婚するまで実家で生活させる遣り取りである。作品に以下の説明がある。「『止腹為婚』と云ふ途方もない婚姻の仕方がかへつて、向ふ見ずの若い情熱に依つて結ばれた婚姻よりもたのもしいやうな気がしてならなかつた。（中略）特に男女間の場合はむしろ精神的浪費が省かれて、澤は今日までの自分の生活が思ひかへされる所があつた。」要するに、一般の媳婦仔の遣り取りでは女性と嫁ぎ先の家族、及びその家族が設けた許婚との間に感情の不和を招く恐れがあるのに比べ、「止腹為婚」は、娘が幼き頃より嫁ぎ先の両親と別々に生活することで、そういった問題を回避する効果を有し、また同時に女性本人にも健やかな性格を養わせることになるのである。（引用：「地方生活」、p. 277）

[32] 以下は関連箇所の引用である。「澤が本を讀んでゐるとき、婉仔がきて、澤の漢文教科書をとつて、すらすらと讀もことがあるので澤は目を見張つた。第一課の日出山上と云ふ所は婉仔には餘りやさしくて、赤坊の本みたいだと偉らさうな顔をして、澤を見返したりして威張つた。しかし澤は婉仔のわからない國語教科書を早く讀み出して、婉仔を羨しがらせた。」（「地方生活」、p. 279）

ただし、作者がこのような媳婦仔という特殊な人物像に設定をしたのは、以前の錦雲の如き一般家庭の娘の場合では、その古典的女性としての社会的生存が約束されておらず、作者の小説作品には珍しく適者生存型として描かれた新女性である淑との対比にならないことが理由だったからであろう。以下はこの二人の女性をめぐる描写に関する引用である。

> 婉仔も物心つく頃から、澤の嫁になると云はれてゐるので、特別王家には親しみを持つて　ゐるが、本能的に遠慮ぶかく、引込みがちで大膽に振るまはれなかつた。しかし淑は、王同年嬸さんの娘とも同じなので、駄々をこねたり、強んだりするやうな我儘な娘であつた。[33]

以上の引用を見ても、ここには「山茶花」における一姉妹である娟と錦雲を以ってなされた比較が見られ、内容の類似性や女性に対する見解の同一性からも、作者の女性観における思想的な統一性が保たれているのが分かる。

また作者は婉仔とその許婚である澤と比較し「人間修養ばかりしてゐる澤と違つて俗気がない」[34]と述べた一言からも、中国伝統の女性の美徳を強く意識していることも感じられる。更に作者は婉仔の持つ「道徳観念」を「精神の力」[35]と述べ、新女性である淑を批判対象として「現代的な女は案外精神力の乏しいことが澤は知つてゐた。健康な体に似はず、享楽を貪ぶりたい性格を澤は恐れてゐた」[36]と論じていることから、根本的には「山茶花」と同様に作者が当時の新女性に対する批判を意図したものであることが分かる。

「地方生活」における古典的女性描写の状況は以上の通りである。ただし、作風としては「山茶花」と比べ、人物設定における極端な飛躍があるため、その虚構性や非現実性がより顕著となったと言える。まず、新女性で言えば、当時の封建社会における庶民家庭では女性への学問は無用との考えが根強く、淑の如く公学校入学が許されたのは偶然と幸運が一致した結果に過ぎない。ただし、現にインテリ女性が台頭しつつある時代であることから、淑の如き存在はその後の社会発展の趨勢を見ても一応は許容できるものである。作者は物語の結びに、淑の利己的な思想概念に着目し、「これがもし現代の道徳であるならば、次に来るべき社会道徳はどんなものあるか、澤は想像されるのだつた」[37]と見解を提示したのも、淑が今後の台湾社会において台頭する女性であることを予想したからである。

---

[33] 同注 8、p. 279。
[34] 同注 8、p. 298。
[35] 同注 8、p. 285。
[36] 同注 8、p. 291。
[37] 同注 8、p. 308。

いっぽう、淑の適者生存と関連し、婉仔においても錦雲の如く結婚後に嫁ぎ先に於ける非人道的扱いもなれば、堕落して俗世間的女性たることもない、古典的女性としての生涯を全うする適者生存の人物として描かれている。前述した如く、古典的女性の生存の条件は、女性に学問を奨励し経済的に力のある貴族階級や有力者の家の出であることである。即ち、庶民家庭の女性は、その唯一の生存の条件である進学が満たされず、古典的な素質を保てないのが一般的である。作者にとってもこの現実は如何ともし難い課題であり、本作品において作者が古典的女性にあえて媳婦仔を当てたのもすでに世間一般では生存の約束された古典的女性が見出せなかったからではなかろうか。すなわち、この人物像の造詣には多くの矛盾が見られ、まず「止腹為婚」による媳婦仔という人物設定そのものが極めて特殊であり作者の観念的要素が濃厚である以外に、その女性の古典文学に精通した教養を如何に養ったかの説明はなされず、さらに他の作品に見られる媳婦仔像及び錦雲を含む旧女性の相手男性がほぼ例外なく不道徳で道楽息子で薄情な人物であるのに対し、本作品では媳婦仔を娶ることに理解を示すインテリ男性となっていることで、人物像の存在における現実味は極めて低くなっている。古典的女性の存在意義に関しては既に「山茶花」で論じられている如く、庶民家庭出身の女性では古典的女性としての存在が困難なものであり、それが媳婦仔たる身の上に置き換えられただけで人物像の古典的女性としての存続が決められるとはとうてい思えない。恐らく作者の意図したところは新たな新女性と比較の手段に過ぎず、人物像のリアリティーは考えの外にあったのであろう。

結果として、往来の作品とは相関性のない人物設定を施したことで、古典的人物像の存在の希薄さを却って裏付けることになった感がある。「山茶花」においては、たとえ制限や条件を受けながらも古典的女性の存在は容認できるものであるが、「地方生活」の場合かなりの面において作者の意図的作為が見られ、その人物像はきわめて作者の主義主張を目的とした、より一層の理想的、観念的な産物となったと思われる。

4・古典的女性像に見られる限界

古典的人物が作者の理想を含む段階において、現社会における人物像の存在は極めて制限されることはすでに前述した。ここでは、その様子を「山茶花」に登場した異なる家庭環境を持つ二種類の古典的女性である錦雲、嬋を通じて検討したい。まず、庶民家庭の錦雲に関しては、漢文や文学に親しみながら中流家庭の家庭に育った女性である。少女時代から娘へと成長する過程では多少

なり自由な生活が許されていたため古典的女性としての優雅な性格を養うことができたのであるが、それは封建的利害結婚に直面するまでの成長期に許されたもので、いったん適齢期の娘に成長すると、日常生活における行動の自由が制限され、徐々に封建伝統による過酷な現実社会に直面するようになる。張文環の小説作品で女性にとって理想の結婚相手に挙がる男性が医者、弁護士、文官、公学校訓導など[38]であるが、このような立派な肩書きを持つ男性との縁談がもたらされるのは「山茶花」嬋のような資産家や有力者の娘に限られ、庶民家庭の娘の縁談に挙がる相手男性は商店経営者（多くが雑貨店）の跡取り息子となっている場合が多い。この錦雲にもたらされた縁談相手は、「渡鳥の様な反物の行商人、製糖会社の女工監督、雑貨店の与太者見たいな若主人、甚だしいのは、第二号……」[39]とあるように、多くが理想と自己の相反した俗物男性となっており、たとえ古典的女性であり器量が良かろうが頭が良かろうが、庶民女性ということが理由で、錦雲のもとにはこれら非理想的な男性との縁談話だけが繰り返し舞い込むのである。だが、結婚適齢期の女性が何度も縁談を断り、嫁ぎ先が決まらないまま年齢を増やすことは娘としての価値が下がることを意味するため、そうした女性に対する圧迫がそれまで天真で純粋であった娘をして徐々に俗世間的なつまらない凡人に変じさせ、理想や希望を捨て現実に妥協させるようになる。[40]すなわち錦雲が古典的でいられたのも、縁談を受ける前の段階に限られたもので、いったん結婚問題に直面すると古典的たる性格や考えを放棄するようになるのである。数多くの縁談話の中から、錦雲が決めた相手が「金持ち」であることだけが取り柄の男性[41]であるが、相手の家庭条件や経済条件を基本に結婚相手を決める利害結婚は、当時の伝統的価値観としては当たり前のことであった。その結果、結婚して嫁いだ錦雲は古典的女性としての魅力を失うのである。

---

[38] 以下は作品からの引用である。「ぽつぽつ縁談がもちこまれて姉は泣いた。（中略）姉は商人よりも学校の先生のサーベルや金モールの肩章に憧れてゐるやうであつた。」（「山茶花」、p. 66）

[39] 同注４、p. 66。

[40] 以下は作品からの引用である。「錦雲は数十回の縁談に疲れてゐた。それのみならず恋の空想にも疲れてゐた。（中略）空想を包み乍ら、一人でたのしむやうな気魄は錦雲にはなかつた、その気魄を養ふロマンチツクな楼閣もなければ、池の水蓮が咲き乱れて上京する秀才が覗きにくる風景も考へられなかつた。結局、人間は空想だけでは生きられないのである。」（「山茶花」、p. 211～212）

[41] 作品には錦雲の相手男性の家庭における問題、そして嫁ぐには相応しくない様子が以下のように述べられている。「向ふはたとへ金持ちであつても、たかが知れてゐるし、それのみならず未亡人の一人息子ではあるし、その未亡人は六十を越してきた今日になつても、村の人に種々取り沙汰されてゐるから、姉さんのやうに体の弱い女はあんな家に嫁がない方が姉さんのためによくはないかと思ふのである。肉体的な仕事が少ないかも知れないが、精神的な苦労が多いに違ひない。」（「山茶花」、p. 199～200）

姉の顔を見た瞬間、娟ははつと暗い影が脳裡をかうめていつたのを感じた。金の腕環や金の指環、耳飾から御化粧まで、けばけばして、姉にふさはしくない飾方であると思つた。[42]

結婚後の錦雲の「ぎすぎすした家庭の婦の態度」に対し、妹である娟が感じたのは「数ヶ月に態度を一変した姉の俗つぽさ」に対する「失望」[43]である。また、このように俗世間的に転じた女性は異性である男性側からとっても恋愛や憧憬の対象でなくなることを意味する。以下はこの錦雲に対する青年主人公の見解が記されたものである。

賢は錦雲の姿をけがらはしく思はやうな気がしてならなかつた。女と云ふものは、男さへ居れば誰でも夫足り得るやうな気がして、美しいものも醜いものも区別のつけられやうがない。」[44]

以前はこの錦雲に多大なる恋慕を懐いていた賢（即ち作者の分身的人物）であるが、理想を捨て打算的結婚を決めた錦雲に対して感じたのは、かつて異性として魅力を感じた女性に対する失望であったことが見て取れよう。

封建的利害結婚は利己主義、虚栄心、利害重視の価値観が蔓延したものであり、当時の台湾社会において庶民家庭出身の女性がこの非理想的な封建的利害結婚から逃れることは叶わず、ある程度の人間性の堕落は現実的で必然的なものであった。かつては純粋で優雅だった女性が結婚して俗世間的なつまらない女性へと転ずることは作者の小説作品において登場する庶民家庭出身のほとんどの女性人物に共通した人物造型の傾向である。それは処女作「落蕾」のヒロイン秀英[45]が封建的利害結婚を受けたことに対し、「矢張り理智を愛するとともに裕福な生活に對する好奇心を捨て得ないのだ」[46]と非難したように、「山茶花」錦雲に対しても作者の庶民出身の女性に対する思想性に対する見解には大きな変化が見られず、ここに作者の古典的女性を理想として描く一つの限界が見られるのである。

一方、資産家階級の嬋においては、その古典的女性としての生存が家庭が資産家で裕福であるという制約を受けたものである。すなわち、このような資産家階級に属する古典的女性は現実社会の不合理な弊害から身を守れる家庭経済の支えがなければ生存できないことを意味する。以下は作品「地に這うもの」からの引用であるが、ここには資産家階級の家長陳久旺が娘（淑銀）を女学校

---

[42] 同注４、p. 225。
[43] 同注４、p. 226。
[44] 同注４、p. 205。
[45] 註１を参考にしていただきたい。
[46] 張文環「落蕾」、『日本統治期台湾文学　台湾人作家小説集　第四巻〔張文環〕』、東京：緑蔭書房、1999 年 7 月 20 日一版、p. 18。

に進学させたいという本意が示されている。

幸い陳武章の学校の成績はいつもトップになっているので、陳久旺は息子に全期待を傾けていた。息子を文官方面へ向けさせるとして、娘はやはり女学校を出ないと理想的なところへ嫁げない世代になったのはすこし不思議に思った。万が一、女学校へ行けなかったら、家つき娘なら理想に近い婿が見つかるだろう。[47]

女性に対して学門を奨励することは庶民階級の家長にはとうてい考えの及ばないことである。引用で取り上げた陳久旺たる人物は先祖代々引き継ぐ老舗である大雑貨店を運営する傍ら名士として保正を担う人物である。陳久旺は実子である武章を師範学校に入学させた一方、一人娘である淑銀に対しても女学校入学を望んだ。このことは同時にその陳久旺の娘に懐く期待が将来的には公学校の訓導や医者や弁護士などの理想的な男性に嫁いで欲しいというものであることが理解できる。だが、作者自身はこのような特権階級、資産家階級、貴族階級の出として教養を与えられた女性は、労働者階級と対立するという意味において自分の世界とは無縁な存在とみなしており、作品においても、嬋の如き女性は庶民階級の人物（主人公である賢を指す）にとって馴染めず生活を共有することが出来ない存在として描かれているのである。以下は嬋の家父に対する主人公の見解である。

賢は女の子の勉強にまでかうも熱心になつてゐる嬋の父に敬服も出来るし、また村の元老としても恥ぢないが、しかし何んとなしに、このおぢさんには親しめないのが寂しかつた。（中略）小姐繡球になるだらうか。美しい花園の楼閣からお姫様があらはれえて、婿様を選んでゐる風景は、嬋の父にかかつてくると詰らないものにぶちこはされてしまふやうであつた。[48]

ちなみに嬋の父は「村の元老」、「保正」かつ「學校の委員」[49]であり、嬋に教育を奨励したのも家柄の体裁があり、立場上、娘の嬋に対し高学歴という分相応の教養は後の自己の利益に繋がるという打算があったからである。嬋は「女学校」入学試験は失敗したが、それでも「Ｋ市の女子公学校の高等科」[50]への入学を果たす。要するに、嬋は当時、一般人が女性の学問に対して消極的であった時代において「村で最初の女学生」[51]となった娘ではあるが、その成果は、

---

[47] 張文環『地に這うもの』、東京：現代文化社、昭和 50 年 9 月 15 日発行、p. 109。
[48] 同注４、p. 136。
[49] 同注４、p. 131。
[50] 同注４、p. 145。
[51] 同注４、p. 131。

父親が地位や権力を有する者であり、親の理解と後押しを受けた必然的な結果によるものである。そして、その古典的女性としての本質が階級的な差別によって成り立つことで、賢は嬋に対する異性としての関心を失う。それは以下の引用からも理解できよう。

> 小姐繡球になるだらうか。美しい花園の楼閣からお姫様があらはれえて、婿様を選んでゐる風景は、嬋の父にかかつてくると詰らないものにぶちこはされてしまふやうであつた。[52]

即ち、この古典的女性たる存在は作者が処女作「落蕾」から始まり、「みさを」、「部落の惨劇」、「闇雞」など多く描き続けた現実社会に生きる庶民女性像と接点がないのと同様、作者が主人公として描く庶民出身の少年、書生、インテリ青年などとも生活基盤が共有できない人物なのである。例えば「頓悟」の呉服店経営者、「闇雞」の老舗漢方薬店店主、「地に這うもの」の老舗雑貨店経営者など、作者の作品に登場する俗世間的で利己的、かつ拝金主義的思想を有する中年男性人物の性格描写に見られるように、作者はこれら世襲的な資産家階級に属する人物を社会道徳腐敗の根源とする人物設定を好む。そのため、たとえ作者は「嬋のお父さんのやうにおべつかつかひの親爺にこんな娘が出来るのも、子供を産むことは福引と同じやうにまぐれあたりもあるやうだ。」[53]と論じながら、その娘である嬋に対する古典的女性としての存続における期待は必ずしも全面的に肯定的[54]な見方を有していないのである。

作者は「山茶花」において石榴売りの農民の娘である陳秀を登場させ、その勤労精神旺盛で商売上手な様を通じて庶民女性の生活力の強さを称えており、逆に労働者階級の生活とは無縁である嬋に対しては以下のような見解を示している。

> たとへばあの親爺から金を取りあげたらむろん保正もやれなくなるし、また役人に用ひら　れることもないから人気のわるい彼は恐らく生活に困るだらう。さしたら嬋も阿秀と同じやうな女の子になるだらうか、（中略）しかしよわよわしい嬋はもしさう云ふ運命に遭つたら岐度早死にするだらう。[55]

古典的女性の生存の絶対条件が資産化階級、貴族階級に属するの裕福な家庭環境であるが、上の例は、その極めて限定された生存条件を論じたものであり、

---

[52] 同注４、p. 136。
[53] 同注４、p. 93。
[54] 或いは、自力で進学を実現し、経済的な負担が強いられ、かつ将来の立身出世する保障されない庶民家庭出身の青年男子の懐く不満が起因となっていることも考えられる。
[55] 同注４、p. 93。

仮に女性がそのような裕福な家庭的環境を消失した場合、残された運命は夭逝のみである。錦雲の如く庶民家庭出身の女性の場合は俗世間的な存在へと変ずるのが常であるが、嬋の如き資産家階級の女性は俗世間的な女性としての生活すら許されていないのである。

5・結論

作者の描く古典的女性は全てが作者が主人公として描くインテリ青年の理想の相手たる形で登場するのが特徴である。だが、当時の新たな現実社会においてその生存基盤は極めて脆弱であったことが理解できる。前で取り上げた引用にある新女性、現代的女性を含めた三通りの比較に示されたように、客観的存在として新女性を設けた段階で、作者はそもそも古典的女性の存在意義に確信を持っていなかったと言える。錦雲の如き一般家庭出身の庶民女性は俗世間的への堕落を余儀なくされ、嬋の如き資産家階級の女性は裕福な家庭基盤を条件とするものである。また、作者の全ての小説作品において庶民家庭出身の女性と対象に古典的女性の適者生存が約束された唯一の女性である婉仔に関しても、作者が人物設定を媳婦仔に限定したことで、結果としては古典的女性の存在意義をさらに理想的、非現実的な存在へと化す結果となった。

即ち、張文環作品における古典的女性の存在は、主に作者の批判する新女性に対する比較手段として用いられた虚構性を多いに含む、理想的産物であると言えるのである。

当時の台湾の封建社会は主に新女性やインテリ女性が台頭する場へと変り、主要な女性の存在は新女性がメインとなるもので、古典的女性が生きる生活環境は残されていない。以下の主人公賢の親類の“姉”に関する描写を参考していただきたい。

> それで姉は表姉妹達と刺繍をしたり、山へ遊びに行つたり、小川で蝦等をとつたりして日を送つてゐた。この小川へも姉はきた。梅の花が咲いて、昔のお姫様が散歩に行くやうな空気がここらあたりにも流れてゐるやうな気がした。賢は独り子のせゐか家の中に一人でも余計に人が殖えてくると嬉しく思ふのである。まして女の子のない家に姉のやうな美しい親類がくると嬉しくて仕様がない。またここで沢蟹を取り乍ら姉のはしやぐ声は音楽のやうにきこえて、梅の花までいつもよりずつと綺麗に見えてならないのである。その姉は一昨年の春に夭折してしまつた。去年姑母を迎ひにここを通たつたときなぞ賢は姑母の溜息を聞いて涙がこぼれさうだつた。（中略）それほど皆に愛されてゐた姉も嘗てはここで共に遊んだことがあ

る。美しい半開きの蕾のままで落とされてしまつたやうな無惨さを子供心にもかんじられるのである。[56]

この“姉”とは主人公である賢の“大姑母さんの長女”[57]であり、古典的女性の一人としてやはり賢の目から見た描写となっている。“姉”は嬋の如く資産家階級ではなく、錦雲と同じく庶民家庭出身の女性である。だが、錦雲と比較した場合、ある意味、古典的女性像の最も理想的な存在であると言える。以下も「山茶花」からの引用である。

……賢もこれに就いては、母とあまり議論したくなかつた。それは都会よりも、賢は田舎婦人の方が教育の有無にかかはらず、古典的な習慣がこびりついてゐからである。女はしとやかでなければならぬこと、女は結婚するまで男と口をきかないこと、また女はみさをがあつて始めて女の資格があるのである。呂雲正と云ふ物語に依つて教育されてゐた。[58]

作者の作家活動期に発表された戦前の小説作品全体において、引用に「田舎婦人」と記されているように、既婚者として特定された古典的人物像に関しては、主に夭逝した主人公賢の“姉”以外、特にこれといった人選が見当たらない。[59]阿錦は作者がこの“姉”をして結婚後間もなく「美しい半開きの蕾のまま」夭逝させたのは、古典的女性が制約の多い実社会において不合理な社会制度や腐敗した道徳観、あるいは歪んだ世俗などに汚されることなく生存する可能性が見出せなかったからである。つまるところ、唯一欠点のない古典的女性たる姿は「山茶花」の主人公“姉”の如く美女薄命で逝去する女性に限られたものとなるのである。

---

[56] 同注４、p. 28～29。
[57] 同注４、p. 27。
[58] 同注４、p. 247。
[59] 古典的女性の婦人像としては「地に這うもの」の阿錦(呉氏錦)も挙げられる。阿錦はある庄の由緒ある漢方薬店老舗の一人娘、即ち良家の出の女性であり、後に老舗大雑貨店の跡取り息子に嫁いだ女性である。結婚後は夫である陳久旺の浮気、不妊による跡取り問題などに悩まされながら、家庭と家業を維持する良妻賢母として堅実に生きぬく。このように古典的人物像の人生描写が戦前の作品に登場する女性像と異なるのは、作品そのものが作者が作家活動を停止してから数十年後の 1975 年の発表であり、古典的女性像としての描写が往年の作品に登場した各女性像よりも複雑化、かつ飛躍したことによるからである。造詣の特徴としては往来に見られた作者の理想概念による造詣が比較的抑えられ、より現実的な要素が加味され、結婚後においては往来の純粋な古典的気質が押さえられるかたちで、多少なりの世俗的、実利的といったマイナス的要素が加えられている。

参考文献

井東襄。『大戦中に於ける台湾の文学』。東京：近代文藝社。1993 年 10 月 23 日。

北見吉弘。「張文環の小説に登場する女性の結婚相手に関して」。(『世新日本語文研究』第三期。台北：2011 年 3 月。

柳書琴（中島利郎訳）。「張文環『山茶花』解説－部落から東京へ、進退窮まった植民地の青年たち」。『日本統治期台湾文学集成２　台湾長編小説集二』。東京：緑蔭書房。2002 年 8 月 31 日。

柳書琴・陳万益・中島利郎（編）。「張文環　著作年譜」。『日本統治期台湾文学集成２　台湾長編小説集二』。東京：緑蔭書房。2002 年 8 月 31 日。

柳書琴（編）。「張文環研究文献」（初編）。『張文環全集』巻８。台中：台中県立文化中心。2002 年３月。

津留信代（陳千武訳）。「張文環作品裡的女性観」（上）。『文芸台湾』1995 年 1 月。

津留信代（陳千武訳）。「張文環作品裡的女性観」（下）。『文芸台湾』1995 年 4 月。

陳万利（編）。『張文環全集』。民国 91 年 3 月。台中：台中県立文化中心。

張文環。『日本統治期台湾文学　台湾人作家作品集　第四巻[張文環]』。中島利郎編。東京：緑蔭書房。1999 年 7 月 20 日。

張文環。『日本統治期台湾文学集成２　台湾長編小説集二』。中島利郎編。東京：緑蔭書房。2002 年 8 月 31 日。

張文環。『地に這うもの』。東京：現代文化社。1975 年９月 15 日。

張文環。「土の匂ひ」。『臺灣文藝』第一巻第三号。1944 年 7 月。台中：臺灣文學奉公會。[60]

張文環。「泣いてゐた女」。『臺灣文藝』第二巻第五号。1935 年 5 月。台中：臺灣文學奉公會。[61]

張文環。「雲の中」。『臺灣文藝』第一巻第五号。1944 年 7 月。台中：臺灣文學奉公會。[62]

張文環。「部落の元老」。『臺灣文藝』第三巻第四・五合併号。1936 年 4 月。台中：臺灣文學奉公會。[63]

許恵玫。「張文環小説中的女性形象分析（上）（下）」。『台湾文芸』。166、167

[60] 底本：『新文學雜誌叢書 33』（台湾：東方文化書局）所収の復刻本。
[61] 底本：『新文學雜誌叢書 7』（台湾：東方文化書局）所収の復刻本。
[62] 底本：『新文學雜誌叢書 34』（台湾：東方文化書局）所収の復刻本。
[63] 底本：『新文學雜誌叢書 10』（台湾：東方文化書局）所収の復刻本。

期。1991 年 1 月。
野間信幸。「『台湾文藝』に於ける張文環」。『野草』49 号（中国文芸研究会）。1992 年２月。
野間信幸。「張文環の戦争協力と文学活動」。藤井 省三、垂水 千恵、黄 英哲(編)『台湾の「大東亜戦争」―文学・メディア・文化』。東京：東京大学出版会。2002 年 12 月。